

< 目的 > 発展途上国が抱える様々な問題の中で、栄養の問題はひとつの重要な課題であると思われる。この課題を考えるためのひとつの資料として、ホンデュラスの高校生を対象に食事に関する調査を行い、まず第一報ではその食生活の実態と傾向をとらえ、検討することを主な目的とした。

< 方法 > ホンデュラスにおける師範高校12校の中から、今回は4校(テグシガルバ校、フティカルバ校、チョルテカ校、テラ校)を選び調査対象校とした。これらの調査地はそれぞれ首都と県庁所在地で、山間部、商業都市、海岸部などを含んでいる。これにより、同国内での食生活の地域差についても考慮してみた。調査方法はアンケート形式を用い、いくつかの食生活に関する質問と、ある一日について、摂取した食品の内容を記入するものとした。対象者は各校の男女生徒(15-20才)、アンケート配布数は各校100部ずつに設定した。

< 結果 > 食生活上の特徴としては、朝食の欠食率が高く、特に下宿生に多く見受けられた。また全体的には、食事内容のパラエティが少なく、同じ食品が1日3食の中で繰り返されることも多い。その中で主食はトルティージャ(とうもろこしの粉を練り、焼いた物)であるが、パンも見られ、また北部海岸地方ではバナナ(数種類あり、主として未熟な緑色の物)が揚げるなどして常食とされていた。他に常食されている食品として、いんげん豆があげられる。食品群別では、魚介類、いんげん豆以外の豆類の摂取が少ないこと、また炭酸飲料が多く飲まれているなどの特徴がある。